

現代の ことば



おおつか あつし
大塚 篤司

祖父母の家は東京の亀有にある。私がまだ子供の頃、玄關横の犬小屋には愛犬「ジューン」がいて、遊びに行くといつも私たち兄弟にじゃれついてきた。ジューンのお決まりの散歩コースは銀杏の枝で覆い尽くされた近所の神社。幼かった私たちはジューンに引きずられ走り、そしてときどき砂利道で転んだ。

膝を擦りむいて泣いている私に、祖母はよく赤チンをつけてくれた。でも正直、赤チンは少し怖かった。傷全体が真っ赤になって、赤チンが乾いた後の皮膚を見るたびに怪我を思い出し、赤チンは2020年の年末に販売が終了する。赤チンを製造していた最後のメーカーが生産を中止することが発表された。

怪我に消毒を すすめない理由

赤チンの代わりに怪我に使われるようになったのが、消毒薬である。ただ、その消毒薬も出番は少なくなってきた。最近の医療現場では、怪我をした際に傷口を消毒するのは良くないとされている。なぜ、消毒が良くないのか？それは、消毒液が傷の治りを妨げてしまうからだ。傷を乾燥させるのも良くない。では、怪我をした時どうしたら良いのか？

まず、怪我をしたら傷をよく洗う。ついつい消毒をしてしまいがちだが、傷口についた汚れを洗い流すのが最初だ。この時、水道水で問題ない。日本の水は、煮沸しなくとも飲めるほど綺麗だ。しっかりと汚れを洗い流す。そして、で

きれば石鹼を使い、十分に泡立て丁寧に洗う。傷口から感染を起さないように、異物や汚れはしっかり落とす。ゴシゴシ洗う必要はないが、小石や小枝が傷の中にはいつている場合は病院でとってもらったほうが良い。

次に、傷口を乾かさないのが大事だ。傷ができるとその部分には創傷治癒に働くいくつかのタンパク質が放出される。これらは傷の治りを早める。湿潤療法と呼ばれる方法で、キズパワードなど薬局で購入できる保護材もある。数日間張りっぱなしにするだけでよく大変便利だ。

ただ、湿潤療法には落とし穴がある。感染に気が付かず、傷が深くなってしまう危険性がある。床ずれに対するラップで密閉するラップ療法というものがある。これも湿潤療法の一つだが、傷の状態を見極める目を持たずに行くと悪化させてしまうリスクがある。汚れた物での外傷や屋外での怪我は、感染を起すかもしれないと考えていたほうが良い。

また、釘のような物を踏んで深い傷ができた場合は、破傷風を起す可能性もあり湿潤療法をしてはいけない。破傷風のワクチンは、一般的に4〜5年の間効果を發揮する。大人になってから、釘を踏んだような深い傷は、破傷風ワクチンの接種が望ましい。

怪我をしたら消毒はせず水道水ですっきり洗う。屋内での怪我であれば、湿潤療法でも感染するとは少ないだろう。ただ、傷の周囲が熱を持ち、赤く腫れてくるようであれば感染を疑う。その場合は、すぐに病院で診てもらったほうが良いだろう。

(京都大学大学院特定准教授・皮膚科)